

(様式1)

令和7年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	子どもたちの発達に応じた知識・技能及び社会参加できる力を培い、可能な限り自立した生活ができ、生きることの喜びを見出せる人間に育てる。
(2) 現状と課題	本校は知的障がいを対象とする特別支援学校であり、小・中・高等部を合わせ226名の児童生徒が在籍している。小・中・高等部の一貫性・系統性のある教育課程の編成や指導内容の精選を進め、「自立と社会参加を目指し、地域とともに、一人一人の幸せ(ウェルビーイング)を育む学校づくり」を学校経営のスローガンに掲げて教育活動に取り組んでいる。また、りんごと岩木山」をテーマとした特色ある教育活動を推進するとともに、「地域とつながろう弘一養SDGsプロジェクト」に取り組んでいる。
(3) 重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 教育目標の達成に向けて、子ども一人一人の人格を尊重し、愛情をもって指導に当たるとともに、子どもが生き生きと学習活動に取り組めるよう、個別最適な学びと協働的な学びの環境を取り入れた授業の充実を図る。 2 子ども一人一人の教育的ニーズや適切な実態把握に基づいて、その障がい特性、発達段<目指す教職員像>子どもの「できる」を見つけ、主体的に取り組む環境を作り、喜びと自信へつなげ、成長へと導き、地域社会から愛され、求められ 3 保護者や地域、並びに福祉、医療、労働等の関係諸機関との連携において、必要な情報を適切に提供し共有することで、指導や支援の充実を図る。 4 子どもの健康・安全に十分配慮し、安心して学習活動に取り組むことができるような学習環境を整える。
(4) 結果の公表	本校の保護者には3月上旬に資料を楽メを通して配付して、主に今後の課題や改善策について公表する。また、地域住民等に対しては、本校のホームページに掲載し公表する。

学校整理番号	特11
学校名	青森県立弘前第一養護学校
対象障害種別	視覚・聴覚・知的・肢体・病弱
自己評価実施日	令和7年12月5日(金)
学校関係者評価実施日	令和8年2月12日(木)

(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成

◎学校運営協議会委員(12名)

- ・弘前学院大学社会福祉学部教授 ・弘前市弥生学園園長
- ・弘前地区手をつなぐ育成会会長 ・弘前市農林部部長
- ・本校PTA会長 ・株式会社タカシン製造2部副部長
- ・Farmなる実 ・駒越町会長 ・船沢小学校校長
- ・船沢中学校校長 ・社会福祉法人伸康会理事長
- ・津軽障害者就業・生活支援センター所長

自 己 評 価				学校関係者評価		(10) 次年度への課題と改善策
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	教育的ニーズに応じた指導・支援の充実と主体的学習活動の推進	(1) それぞれの実態に応じた個別の指導計画作成とそれを活用した授業の充実	①児童生徒一人一人の実態を的確に把握して個別の指導計画を作成し、重点課題を中心に発達段階にそった指導に努めた。 ②効果的な指導を展開するため、児童生徒の興味・関心を考慮した教材の研究や障がい特性に応じた支援ツールの開発に取り組んだ。	A	○学校評価の保護者アンケートでは、今年度から記名式になったにも関わらず、9割の回答があったということで、学校と保護者間で信頼関係があったからだと考えられる。学校側の丁寧な対応を引き続きお願いしたい。 ○DXでは、ゲーム制作、水耕栽培等、生徒にとって安全に失敗を経験できる場である。失敗は必要であり、それをどのように解決するかという能力が大事である。 ○VRの活用がすばらしい。体育の一環として活用されると、おもしろいと思う。また、熊対策としてVRで補うという考え方もできるのではないかと。また、熊対策としてeスポーツは単なる娯楽ではなく、「認知能力の向上」「空間概念の把握」「目と手の協調運動」を促進する高度な学習手段の一つとなるため、ぜひ活用して児童生徒の力を伸ばしてほしい。また、ICTやプログラミングの導入、児童生徒の経験値を飛躍的に高め、将来的な技術習得の基盤となる。	○一人一人の知的及び身体的発達段階に応じた学習内容の設定と障がい特性に応じた必要な支援の提供 ○個別の指導計画を活用した授業の充実と授業研究を通じた授業改善 ○教員の専門性の向上
		(2) 小学部・中学部・高等部の12年間における一貫した系統性のある教育課程の編成と指導内容の精選	①児童生徒の将来の自立を念頭に発達段階を考慮し、一貫性、系統性のある教育課程の編成に取り組んだ。 ②学習指導要領に対応した教育課程になるよう各学部、全校で見直しを図り、つながりや発展性等について検討した。	A	○12年間の一貫した系統性のある指導内容、指導方法、指導時数等、教育課程の編成	
		(3) 主体的・対話的で深い学びの視点からの学習に対する研究の推進とICTを活用した指導実践の蓄積	①一人一台端末が整備され、ICT機器を活用した授業実践に取り組んだ。 ②ICTを活用した指導について、外部講師を招いての教員研修に取り組んだ。 ③R5年度から、校内研究で「学びをつなげ、深め、生かす児童生徒の育成」のテーマを設定し、学びを実生活につなげることを意識した取組についての研究に取り組んだ。	A	○授業研究の推進 ○ICTの積極的な学習活動への活用(DX加速化推進事業含む) ○教員の研修機会の充実	

2	地域に根ざした特色ある教育活動の充実	(1) 交流及び共同学習のさらなる推進	<p>①学校間交流は、小学部は船沢小学校と、中学部は船沢中学校及び柏木農業高等学校とそれぞれ2回、高等部は柏木農業高等学校と実施した。</p> <p>②中学部の授業において、作業学習（畑・木工班）で弘前工業高等学校建築科の生徒を講師に招いたり、総合的な学習の時間の授業で柏木農業高等学校の生徒から花の植え方を習ったりして交流した。</p> <p>③高等部では、一部の生徒が柏木農業高等学校に出かけ、農業実習を行った。</p> <p>④居住地校交流は、小学部30名、中学部4名が、それぞれ1～3回実施した。</p>	A	<p>○年数回の交流では、弘前第一養護学校生徒による出身地域（黒石、平川、弘前）ごとの「ねぶた」の差異を学ぶ総合学習のプレゼンが、船沢中学校生徒たちの知的好奇心を刺激し、相互理解を深めていた。</p> <p>○居住地校交流も含め、たくさんの交流を継続していきたい。</p>	<p>○学校間交流、居住地校交流の工夫とさらなる推進</p> <p>○地域の教育委員会や小中学校、高等学校との連携強化</p>
		(2) 「りんごと岩木山」をテーマとした教育活動の充実と発展	<p>①「りんごと岩木山」をテーマとした教育活動では、作品を校内に掲示した。</p> <p>②小・中学部では、りんごの栽培（摘果、葉取り、収穫）、加工（ジュース、スイーツ作り等）を実施した。栽培では、りんご栽培を手掛けている保護者に協力してもらい、作業することができた。</p>	A		<p>○「りんごと岩木山」をテーマとした諸活動の充実</p>
		(3) 本校の教育活動を地域へ発信するための活動の工夫と地域における特別支援教育のセンター的機能の充実	<p>①福祉作品展、カルチャロード等、地域のイベントに参加した。カルチャロードでは、生徒がボランティア活動に参加した。また、毎年実施しているイオンタウン弘前樋の口での合同作品展では創立60周年にちなんだ作品を展示した弘前第二養護学校と合同で開催し、中学部と高等部は作業製品の販売学習も行った。ホームページやチラシの他、新聞社の協力を得て宣伝活動を行うことで、多数の方に来場いただき、本校の教育活動に対する理解・啓発を図るよい機会となった。</p> <p>②高等部の作業体験学習では、弘前市役所等での販売学習を行った。作業製品の販売や作業内容の紹介により、地域の方々に広く情報発信した。</p> <p>③高等部校舎のいわぶがルームで教育相談を受ける体制をとっている。</p>	A		<p>○地域の人材をはじめとする地域資源の積極的な活用</p> <p>○地域の関係機関との連携・協力による積極的な情報発信</p> <p>○地域における特別支援教育のセンター的機能の充実</p>

3	教育的ニーズに応じたキャリア教育の充実	(1) キャリア教育の概念に基づく小中高一貫した指導の推進と就労に向けた学習内容の体系化	① キャリア教育の視点を生かした小学部からの一貫性・系統性のある指導の一環として、小学部におけるリサイクル活動や、中学部における「働く週間」等の取組を行った。高等部では、作業学習や職業の授業改善、実習の充実に積極的に取り組んだ。 ② 小学部・学年で「キャリア・パスポート」を作成し活用した。	A	○ 農福学連携が、卒業生進路一覧に反映されて、増えていくとよい。 ○ 委員のりんご園で、今年度3回実施された高等部での農業体験において、生徒が意欲的に取り組む姿を見ることができた。この体験が「働く意欲」の醸成につながっているため、本校ならではの取り組みを継続してほしい。また、行政として個々の希望を実現するためのマッチングとバックアップ体制を強化していきたい。	○ 小学部リサイクル活動の発展 ○ 「キャリア・パスポート」の活用等を通じた12年間の一貫した系統性のあるキャリア教育の推進
		(2) 地域の人財や資源を活用した授業の推進と卒業後の就労・生活支援を見据えた職業教育の充実	① 弘前職業安定所や津軽障害者就業・生活支援センター、青森障害者職業センター、さくらジョブネット等、関係機関との連携強化に努めた。 ② 公共施設（市役所庁舎、市民会館）の清掃体験を実施するなど、地域の施設・人材等、社会資源の積極的活用を図った。また実習先や進路先の開拓・確保に努めるなど児童生徒一人一人の進路選択や進路実現に取り組んだ。 ③ 「好き」を見つける学びの充実支援事業を活用し各学部において児童生徒の発達段階や課題に応じた体験的な学習活動を設定し、外部講師として地域の人材を積極的に活用した授業に取り組んだ。	A		○ 地域人材や地域資源の積極的な活用による授業の充実 ○ 関係機関との連携強化 ○ 実習先や進路先開拓の推進 ○ 高等部職業教育の充実
4	保護者・地域関係機関との協働による開かれた学校作りの推進	(1) 個別の教育支援計画の作成と活用並びに評価を通じた保護者や地域、関係諸機関等との積極的な情報交換及び情報共有	① 個別の教育支援計画や指導計画を作成し、年2回、保護者との個別面談で、目標や到達度について保護者との情報共有を図った。 ② 児童生徒の学校・家庭での生活等について、連絡帳で情報共有した。また、定期的に学級通信を発行し、学級の教育活動を伝えるなど相互理解に努めた。 ③ ケース会議、通院帯同等を適宜実施し、地域の福祉・医療・労働等の関係機関との情報共有を図った。	A	○ 町内の高齢化に伴い、花壇の世話が難しくなっている。七つの花壇があり、一部を高等部においてお願いした。また、町内のグラウンドゴルフ愛好会が高等部との交流をしており、地域と関わりがあり、とてもよい。 ○ 特色ある教育として実施しているSDGsやDX関係の取組を、ぜひ地域だけでなく、一般社会にも分かるように発信していきたい。	○ 個別の教育支援計画の作成を通じた保護者との一層の情報共有 ○ 学級通信や連絡帳等を通じた日々の相互理解の促進 ○ 地域の福祉・医療・労働等の関係機関との連携推進
		(2) 学校ホームページや学校だより、PTA通信等による教育活動の積極的な情報提供	① 多くの人に本校の教育活動を知ってもらうため、学校ホームページで学校・学部行事や特色ある教育活動を中心に紹介した。 ② 学校だよりやPTA通信を定期的に発行し、保護者や関係機関、地域に対して情報発信した。	A	○ 職員による学校評価の自己評価では、前向きな意見が出されていたよかった。	○ 学校ホームページ、学校だより、PTA通信、SDGs通信等を活用した教育活動の積極的発信
		(3) 外部関係者からの意見を参考にした教育活動の計画・実施	① 学校運営協議会を3回開催し、地域と連携した教育活動や農福連携に向けた取組等について委員からたくさんのお話をいただいた。	A		○ 学校運営協議会をより効果的に活用するための取組

(11) 総括
 教育活動について計画したものについては実施することができた。教職員による自己評価は、どの項目もすべてA評価となり、全般的に高い評価であった。また、保護者アンケート及び学校関係者アンケートにおいても、全ての項目がA評価となり、高評価であった。
 今後も、学校教育目標の実現に向け、DX加速化推進事業及びICT機器等の活用を含む教師の授業力向上のための研修機会の確保や、就農を含めた実習先及び進路先の開拓、家庭や地域との連携強化のための取組等について、引き続き学校運営協議会等を有効に活用しながら、取組を進めていきたい。